「お前が二十歳になるまで、わしは絶対死なんけんのお」

流転の海

1984年 福武書店

Story

愛媛県一本松村出身の松坂熊吾は、五十歳にして初めて子供を授かった。予定日よりひと月早く生まれたためか、病弱な我が子。この子が二十歳になるまでは、絶対に死なないと熊吾は誓う。戦前より自動車部品会社で一財を成していた熊吾は、徴兵のため一旦事業をすべてたたむ。復員後、生き馬の目を抜く大阪の闇市で、新生・松坂商会は熊吾の機知に富んだ経営力と旧知の協力によりふたたび大きな利益を得るが、信頼していた人々の裏切り等をきっかけに、熊吾は新しい生き方を模索し始める。

『流転の海』シリーズ

『流転の海』シリーズは、宮本氏のライフワークとなる長編連作である。宮本氏の父、母、そして自分自身をモデルとしているといわれ、物語は主人公の熊吾に関わる個性的な人達を中心に、終戦直後の混乱の中、必死にもがき生きてきた人々の生きざまを描く。舞台は、時代が進むにつれ、故郷の愛媛、新天地を目指して移住した富山、そして再び大阪へと変遷すると同時に、父を中心に描かれる世界から、息子の目を通した物語へとなってゆく。

『地の星』（流転の海 第二部）新潮社1992年11月／『血脈の火』（流転の海 第三部）新潮社1996年9月
『天の夜曲』（流転の海 第四部）新潮社2002年6月／『花の回廊』（流転の海 第五部）新潮社2007年7月
『慈雨の音』（流転の海 第六部）新潮社2011年8月
現在、「新潮」（新潮社）にて、第七部である『満月の道』が連載中。

「熊吾」という超越した男性

実業家として成功する反面、従業員には「飼い犬に手をかまれる」ようなことを何度も経験する熊吾。息子を溺愛。妻に対しては愛情をしめしつつも乱暴をふるったりする、明治の男そのものである熊吾の生きざま。この家族に今後どのような未来が待っているのだろうか。

Review